

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

1940年～1945年のペルー日本人移民：
排日・追放・抑留の時代

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Oohama, Naoko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1473

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



1940年～1945年のペルー日本人移民：排日・追放・抑留の時代

大濱 直子

2011年6月14日、ペルーの元大統領アラン・ガルシア（1984-2000,2006-2011）元アブラ党歴代書記長）は、第二次世界大戦下における対日宣戦布告なしに行われた米国への日本人移民強制連行を主とする問題に関し、正式な謝罪をした。米国に加担したペルー政府として、70年を経ての初めての公式謝罪ではあったが、元抑留者に対する補償への言及はなかった。

たとえ謝罪のみであっても元抑留者にとっては重要なものであった。

本稿が目指したものは、上記のごとく第二次世界大戦前夜からペルー日本人移民社会が巻き込まれて行く強制連行の時代に焦点を当てることである。そしてペルー移民史の転換期ともいえるこの時代において、彼らを取り巻いていた社会と彼らがたどった道に新たな解釈を試みることである。

1940年から1945年にかけては、ペルー日本人移民史における大きな事件が立て続けに起こった。リマ・カヤオの「排日暴動事件」、封鎖対象国民宣言リスト（リスタ・ネグラ・米国主導の所謂ブラックリスト）による日系人逮捕、ペルー追放から米国のキャンプへ、地方の日本人社会の崩壊、敗戦後の元抑留者たちの米国からの再追放としての日本への帰国、太平洋を挟んでの家族離散などである。開戦後は在外公館が閉鎖され、他国の利益代表（当初はスペイン）の存在はあるものの、母国と切り離された彼らは自力で活路を見つけねばならなかった。

これまで、この時代の出来事に関する解釈は偏重しており、当事者たちは「排日」にまつわる流言飛語に怯えながら、息を潜めていた「声を上げることが出来ない弱者」として描かれ続けた。そして、現在もなお当時の記憶や語りは、リマを起源とする受難一辺倒になりがちなオフィシャル・ストーリーに引きずられたままの観を逃れられない。ペルー日本人移民史の中や当事者たちとの面談の場で繰り返されるのは「日本人が妬まれたからね。仕方なかった」というフレーズである。このフレーズは排日暴動と強制連行問題が一連の排日の系譜という解釈を生きながらえさせて来たことは否めない。

この背景として考えられることは、これまでに見落とされてきた二点である。一つは、日本人が入植した耕地や地方都市で何が起きていたのかが置き去りにされがちであったという点である。もう一つは、日本人移民の周囲で暮らしていた「ペルー人の日本人移民への視点」の欠落ではないだろうか。この二つの問題点は、この時代の移民史への新たな解釈を阻んできたのかもしれない。

本論分では上記の一点目に関して、北部ペルーの地方都市バイエケ県のチクラヨ市でのケースを取り上げ、二点目に関しては少数ではあるが、ペルー人のインフォーマントを加える努力をしホスト国の抱えていた社会背景にも目配りをした。

内外の先行研究において、この時代の出来事はペルー日本人移民史の中で時系列に添い沿い取り上げられてきた。だが、強制連行問題をひとつの独立したテーマとして扱った国内の第一人者は天理大学の山倉明弘である。天理大学アメリカス学会の論集『アメリカス研究』創刊号掲載の「日系ペルー人米国強制連行」(山倉 1996 : 69 - 84)、及び同誌 2 号の「在ペルー日系人米国強制連行の実態」(山倉 1997 : 79 - 89)において、この事件の全貌をほぼ明らかにし、それ以降は、米国主導の日系人駆逐作戦を可能にさせた“法的根拠”問題を追いつけてきた。2011 年には、米国とペルー両国による日系人強制収容問題の法を巡る調査研究の集大成ともいえる『市民的自由:アメリカ日系人強制収容のリーガル・ヒストリー』(2011)を上梓している。(本稿では、山倉の最新の文献で紹介されている調査結果や数は反映させられなかった。)

無論このテーマに言及している初期の研究は存在し、小山起功の「日系ペルー人の米国残留事情」(小山 : 1981)があるが、本著後半には当事者である工藤六一へのインタビューを編集したものであり、ペルーからの追放、抑留という貴重な体験記となっている。彼の研究報告は、東出誓一の『涙のアディオス』(東出 1995)に先駆けて書かれた画期的なものだろう。『涙のアディオス』は、英訳出版されたことで、米国におけるペルーからの抑留問題を扱う研究に大きく貢献した。1940 年の暴動事件、続く強制連行に関しては、先にも述べたようにリマ中心の情報に偏りがちであるが、本書はペルー南部海岸の地方都市イーカでの出来事の記録である。

小山や山倉の研究で言及されている英文基本文献としては、Gardiner(1975、1981)、Barnhart(1962)、Emmerson(1978)、Connell(2002)などがある。また、ミチコ・ウェグリン著『アメリカ強制収容所』(1973)も、ペルー日系民の抑留に関しては、前期の英文資料に依拠している。(無論これまでに北米の日本人抑留問題の中でペルーのケースに言及しているものが多々あるだろうが、ここでは扱わない)。本論文で取り上げたペルーの研究者には M.Fukumoto, A.Sakuda, L.Torres などが挙げられるが、詳細は本論の引用部分で紹介したい。

以下は各章の概略である。

第一章：第二次世界大戦と中南米日系人強制連行

まず、北米の日系人強制連行の影に隠れて十分に周知されていない、中南米からの北米への強制連行の展開を扱う。中南米諸国が無論直接派兵することはなかったが、中南米各国は米国に配慮しながら、日本に対して国交断絶や宣戦布告をしてゆくのだが、その経緯と全体像を見渡し、日本人移民への影響を紹介する。約 1800 名の抑留者を出したペルーの強制連行問題であるが、ペルー北部海岸都市チクラヨでは日系人社会の崩壊劇に発展した。果たしてその崩壊の力学は強制連行を排日の系譜で語ってきたリマ発のおける排日キャンペーンに基づくものであったかを、聞き取りにより検証してゆく。つまり日本人のイメージは仮敵兵像と結びついていたかどうかを考察する。だが、あく

まで現地の数名のインフォーマントたちの談話に限って言えば、彼らはそれを否定し、マスコミやアブラの試みは意味をなさなかった。

第二章:排日暴動再考

本章では、前章のテーマであった強制連行の前段階として捕えられてきたリマ・カヤオ地区で同時多発的に起きた排日暴動への疑問を提示する。当時を知るインフォーマントたちは、事件の報道記事による日本軍の噂や、古屋時事件(後述)と呼ばれる二つの要素を口にしたのだが、略奪の現場を見下ろしながら「暴徒」と名指されて来たペルー人たちの風体や言動をよく観察していた。

日本人は耕地移民という最下層からリマへ流入し、ついには社会層を上昇て、中間層とも言える地位に駆けあがった多くいた。しかしながら、現地のペルー人にそれはかなわず、恨みを買ったといわれてきた。だが、当時ペルーの国民自体が各地からリマへの人口流入を起こしていた。

この暴動の背景には産業構造の変化、背景にあると思われた大学生の政治運動や労働運動の萌芽があった。労働運動これまでの組織動員の可能性を考えながら、何の疑問も持たれないまま今日まで名指されていた「暴徒」とは誰を指すのかについて探つてゆく。そして、この暴動は排日の思想で起こされたとは言えない背景が浮かび上がってくる。

第三章:ペルーを離れて

本章では、第二次世界大戦前後に自らの意思でペルーを離れたり、あるいは米国とペルーの追放プログラムにより引き剥がされた人々、ペルーを離れた後に、ペルー帰還がかなわなかった人々に焦点をあてるが、中心となるのは元抑留者達である。

米国での抑留生活に関しては、家族キャンプと単身者キャンプの日常に関し当事者の回顧録も多用しながら明らかにし、時を経て戦後初めてキャンプ跡地を訪問する元抑留者達の感慨や現地での催事にも触れる。

多くの日系ペルー人家族が過ごしたクリスタル・シティ家族キャンプは、2002年当時は、蔬菜栽培に従事しているメキシコ人移民たちが住む地域になっていた。元抑留者たちは現地において予想外の過剰とも言える演出がほどこされた歓待を受けたのだが、元抑留者の中には戸惑いを感じた人も認められた。米国側による抑留キャンプの歴史化への試みは、当該地に生きるメキシコ移民達の発する米国政府へのメッセージや戦略とも解釈できた。

ともかくも、ペルーで逮捕され追放され、米国上陸した抑留者たちは、主としてケネディ・キャンプに送られた。その後配偶者を追い渡米した家族と合流した人はクリスタル・シティへ、残りの独身者はサンタフェ敵性国人抑留所に送られた。その中には、青年層が多いポリビアからのグループもいた。ペルーからの抑留者たちは、米国内やハワイからの同朋たちと同じキャンプにいながらも交流することは困難であった。

第四章ボリビアからの抑留者たち

本章では、少数ではあるが 29 名の追放者を出したボリビアのケースに触れる。ペルーからの抑留者達はボリビアからの抑留者たちとケネディキャンプで会うことになる。当事者の記憶には、単に日米の戦争の枠組みでは説明出来ない傾向が認められる。また、ペルーのケースと違い排日的空気存在の否定をし、親日的であったと語る元抑留者が多かった。一説では、主なターゲットであったはずのドイツ人たちが、追放直前に逃亡した為、やむなく日本人が頭数合わせで逮捕を余儀なくされたという。しかし、逮捕者には、財産も日本人社会の中での影響力もなく、ボリビア滞在期間も短い青年たちがいたが、彼らの多くは鉱産物を扱う商社勤務であった。

当時、ボリビア国内には政治思想題や鉱山問題を抱えており、米国に招待された大統領はボリビアの錫の優先的な輸出を確約してしまう。その後の政変で米国や南米諸国の承認を必要としていた暫定政権は、米国の承認を得る。すると、それまで逮捕され拘留中の日本人は、ラパス高原から米国の軍用機で追放されたのだ。ボリビアのケースは国内の政変が深く係っていたのではないかという可能性が残された。

本論の結びにおいては、ペルーにとどまった移民二世の熱狂的なカトリック信仰活動に触れる。彼らのキャラバン隊は、強制連行へ対抗するかの用に追放者を出し続ける北部へ向かっていたのであった。

1940 年から 1945 年に掛けて移民社会を揺るがした排日暴動と強制連行を中心にすえた本論文の概要を紹介したが、公文書などでの確認作業やインフォーマントの数の少なさ、方法論の欠落など多くの指摘を受けるに違いない。しかしながら、ここでは、実際に採集した当事者たちの「語り」に重きを置いた。最後に少なくとも以下の点を敢えて指摘することにより、この時代の諸問題への別の側面と新たな解釈の可能性を提示出来ていれればと願う。

1. 排日暴動と強制連行は、排日の系譜で語るべきではなく、排日はペルー国民の民意を反映したものでもないだろう。また、ペルーやボリビアにおける強制連行を日米の戦争の枠組みで理解してはいけない。
2. 排日暴動を引き起こしたのは、単なる暴動・略奪ではなく首都リマへのペルー人の流入、産業構造の変化、労働運動の芽生え、学生や労働者とアブラの連携による関与の可能性が大きい。
3. チクラヨ市周辺では、リマより以前から耕地周辺や市内で働く日本人の姿があり、現地のペルー人にはチラシや新聞による排日キャンペーンにおける「敵の姿」としては写らなかった。体躯に恵まれたペルー兵士へのイメージと貧弱な日本人はむすびつ

かず、仮想日本兵の噂の存在は笑い飛ばすペルー人インフォーマントが多かった。彼らはむしろ日本人達の勤勉さをよく記憶していた。

4. 元抑留者たち(一世および二世)がペルーを離れて一番の苦勞と感じたのは、抑留生活より、日本にたどり着いてからであった。元抑留者たち(二世世代)にとっては、米国でのキャンプ生活で知りえた米国にはむしろ郷愁と好感を感じる人が多数であり追放の実行者であるペルー政府への嫌悪感が際立っていた。

また、キャンプ跡地におけるメキシコ系移民の今日的取り組みは元抑留者には戸惑いを与えた。

5. ボリビアでは、日本むけ軍需物資である鉱物資源(錫、銅、アンチモニー)を扱う商店があり、中心的なカサ・ショウワでは外交官や商社員の情報交換の場であった。カサ・ショウワと同様に鉱産物を扱う商店に青年層の外務省の商業実習生が働いていたが、彼ら20代の逮捕者が多いのが特徴的であった。

ボリビアのケースにおいては、米国とボリビアが日本への鉱物資源調達に警戒したということも考えられるが、ペルーのような排日の動きもないと感じていた日本人達が追放が実行されたのは、度重なる政変続きの果て暫定政権の承認と引き換えでもあった可能性を残している。